

Zarya Vrabcheva eArth transitions

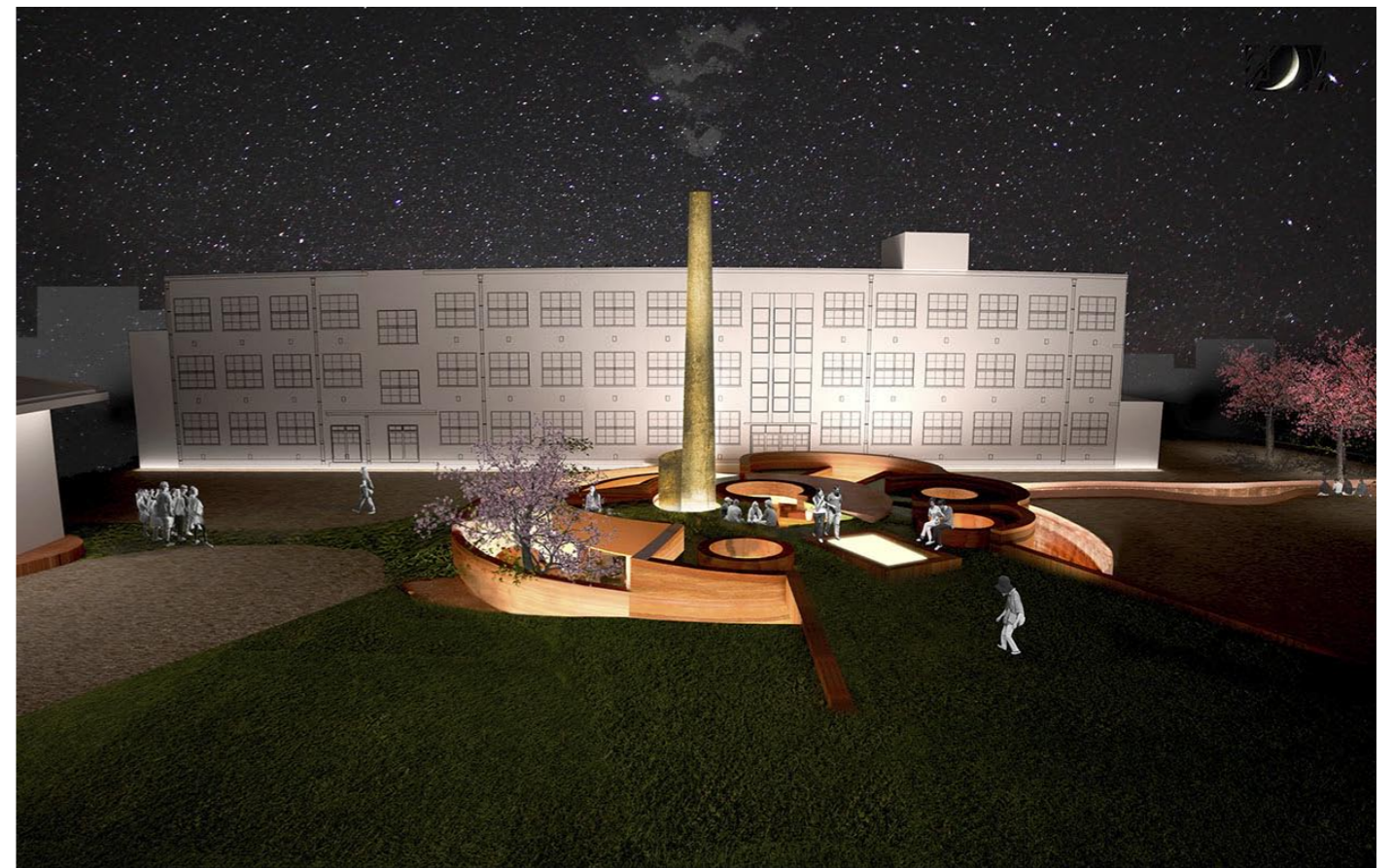
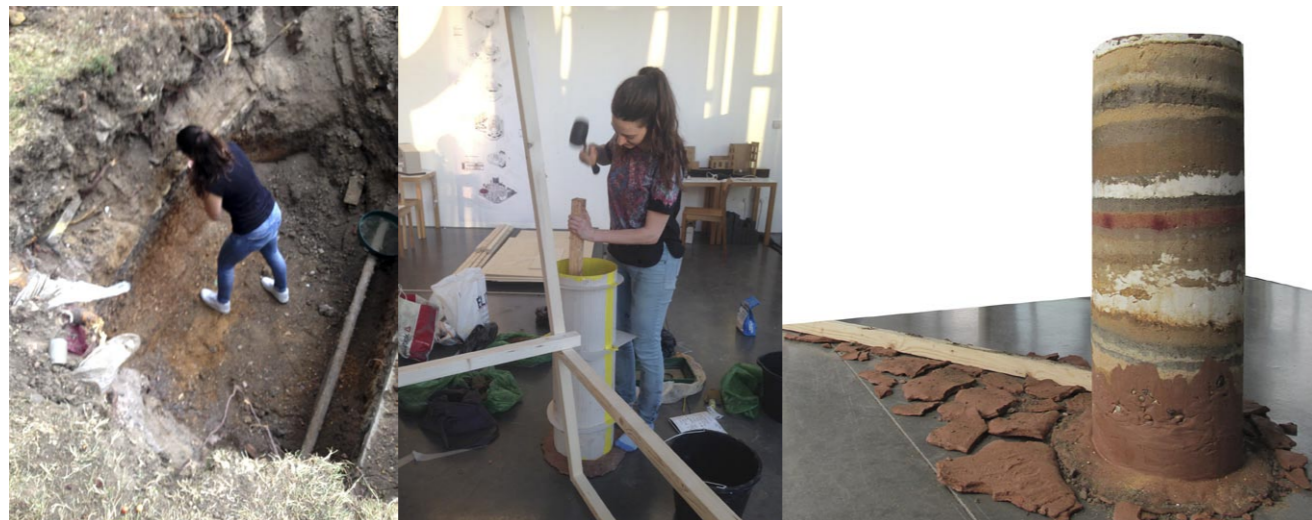
「樹は成長しているとき、柔らかで傷つきやすい。だが枯れて堅くなると、樹は死ぬ。堅さとこわばりは死の随伴者だ。柔らかさと弱さは、存在のみずみずしさの表現である。堅くなったものは決して勝利することはないからである。」——アンドレイ・タルコフスキー

うつろいのなかにあることが私たちの本来のあり方です。私たちが住まう空間もそうあるべきです。私のロイヤル・カレッジ・オブ・アート (RCA) の修了作品の根元にあるのは、インテリアとは「あいだ」としての空間であり、うつろいであり、それに関わる活動とともに変化する生きた有機体であるという考えです。修士課程の2年目、私はRCAの交換留学制度で1セメスターを京都市立芸術大学で過ごしましたが、そこでの経験はこの批判的思考をさらに強化してくれました。滞在中、私は、土の可能性を押し広げ、土がサステイナブルで豊かな美しさをもつ建材であることをあらわにする共同制作に参加しました。建築プロセスを通じて、私は他の学生たちと交流し、身の回りにあるものに対する日本人の意識や、自然を敬う心に魅了されました。私は今もよく覚えています。最初の日、井上明彦先生が私を丘の上に連れて行き、つちのいえを見せてくれ、5分後には木のハンマーで土の地面をたたいたことを。つちのいえのメンバーとして過ごしたのは短い期間でしたが、そこで私は、どのように土地から土を集め、水とこね合わせ、日干しレンガをつくるのか、そしていつも私たちの足下にある土が少しずつ社会的空間へ成長していくのかをまのあたりにしました。

この大きな経験が刺激となって、RCAでの私のプロポーザルは、運動場に新しい陶磁器工房をつくり、元崇仁小学校の空間を活性化するというものへと発展しました。すでにある場所と材料を使い、地面の上と下の境界に新しい空間をさし込み、そこで人間の創造活動の原初の材料である土にもっとも近い陶磁器をつくるというものです。風景は、空虚を埋めるのではなく、ボリュームをうがつことで室内空間をつくりだす彫刻的なマスとして操作されます。この方法は、建物を時間と空間の中で進化・形成することを促し、文化的アイデンティティを保持しながら、将来の更新にも対応することを可能にします。念頭にあるのは、都市における芸術機関の役割を強化すること、つまり、好奇心と想像力、情熱こそがすぐれた創造を導くエンジンであることを示すことです。

ザーリャ・ヴラブチェバ
インテリアデザイナー (MA)
<http://zaryavrabcheva.com>

ロンドンで修了制作を制作中のザーリャ 2015年



Zarya Vrabcheva, eArth transitions, 2015

A proposal for re-vitalizing the playground of an abandoned school in Kyoto to ceramics workshops, gallery and public spaces.

